楓之典君乳母草子

～日々是猫日～　其の漆

猫の日本史

中條　恵子　陸自85

寛平元年二月六日。朕閑時述猫消息曰。驪猫一隻。大宰少貳源精秩満来朝所献於先帝。

寛平元年二月六日。朕の閑時に、猫の消息を述べて曰ふ。驪猫一隻。大宰少弐源精の秩満ちて来朝し、先帝に献ずる所なり。

先帝愛翫數日之後賜之于朕。朕撫養五年于今。毎旦給之以乳粥。

先帝、愛玩すること数日の後、之を朕に賜ふ。朕、撫養すること今五年なり。毎旦、乳粥を以て之に給ふ。

『寛平御記』

● 猫の日本史

宇多天皇の『寛平御記』は、本邦初の飼い猫の記録です。

日出る処へ猫様が降臨したのは飛鳥～奈良時代とされてきました。船中で大切な経典を鼠から守り、仏教伝来とともに唐から渡って来たものと考えられていたのです。

古今東西私共の心を捉え、食料、仏典、蚕などへの鼠害を防ぎ、お子と遊び、ヒトを慰め、時を計り、化けて恩を返した…瑞穂の国の猫様の歴史をひも解きます。

○ 弥生時代―カラカミ遺跡の猫

平成23（２０１１）年、長崎県で弥生時代後期のカラカミ遺跡から出土した骨の一つが、成熟した猫の前足と判明しました。

遺跡に後から紛れ込んだ猫の骨かと思われましたが、鑑定の結果、弥生時代のものと確定し、猫様の日本史が一気に４００年～６００年遡ることとなりました。現在は、この骨が「日本最古のイエネコ」と考えられています。

○ 平安時代―書物に記された猫

奈良時代後期に中国から渡来した貴重な猫様は、「唐猫（からねこ）」と呼ばれました。やんごとなき方々に撫育され、その愛らしい姿は歴代帝の心をも癒やし、『寛平御記』以外の書物にも多々登場します。

☆日本霊異記

奈良薬師寺の僧・景戒が編纂した日本最古の仏教説話集『日本霊異記』は、猫様が確認される日本最古の文献でもあります。

豊前国宮子郡（ぶぜんのくにみやこぐん）の膳臣広国（かしわでのおみひろくに）の亡父が、地獄で飢えに苦しみ、猫（原文表記は「狸（たぬき）」）に姿を変えて広国の家を訪れて空腹を満たしたという話が、慶雲２（７０５）年９月15日付で記載されています。

当時はヒトが猫様にも転生すると考えられていたのです。

☆『小右記』『枕草子』

一条天皇は愛猫家として名高く、そのご様子は公卿・藤原実資の日記『小右記』や中宮定子に仕えた清少納言の『枕草子』に猫かれています。

内裏の御猫、子を生む。女院・左大臣・右大臣の産養ひの事有り。…猫の乳母、馬の命婦なり。時の人これを咲ふ云々。奇怪の事なり。…未だ禽獣に人乳を用うこと聞かざるなり。嗚呼。

『小右記』長保1年9月19日条

うへにさぶらふ御猫は、かうぶりにて、命婦のおとどとて、いみじうをかしければ、かしづかせたまふが、端に出いでて臥ふしたるに、乳母の馬の命婦、「あなまさなや。入りたまへ」と呼ぶに、日の差し入りたるに眠りてゐたるを、おどかすとて、「翁丸いづら。命婦のおとど食へ」といふに、まことかとて、しれものは走りかかりたれば、おびえ惑ひて、御簾のうちに入りぬ。朝餉の御前に、上おはしますに、御覧じていみじうおどろかせたまふ。猫を御ふところに入れさせ給ひて、男ども召せば、蔵人忠隆、なりなか参りたれば、「この翁丸、打ち調じて、犬島へつかはせ、ただ今」

『枕草子』第9段

子猫に貴族の子と同様の産養（うぶやしなひ）の儀を行い、官位を授け、乳母を侍らせ、追いかけて怖がらせた犬を配流するなど、帝の溺愛ぶりは相当なものでした。

☆『源氏物語』

現存する世界最古の物語『源氏物語』第34帖「若菜」では、唐猫が重要な役割で登場します。

衛門督・柏木は、光源氏の正妻・女三の宮との道ならぬ恋の末落命してしまいますが、女三の宮の姿を初めて垣間見たのは、源氏邸で催された蹴鞠の宴の折に、渡殿へ走り出てきた小さな唐猫の紐が御簾の端に掛かりめくり上がったときでした。

東宮を介してこの唐猫を引き取った柏木は、「ねう、ねう」と可愛らしく鳴く様を女三の宮に重ねて、夜も昼もなく溺愛するのです。柏木の夢に現れて、女三の宮懐妊を暗示するのもこの猫様です。

紫式部は一条天皇の女御彰子の局に仕える女房でした。

☆『本朝世紀』『徒然草』

平安末期の『本朝世紀』に、「近江の国と美濃の国の山中に奇獣が出る。土地の人々はこれを猫と呼んでいる。」との記述があります。この説話が猫の怪の初出と言われ、後の猫又、化猫譚に引き継がれていきます。

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経上りて、猫またに成りて、人とる事はありなるものを」と言ふ者ありける　『徒然草』第89段

人里にあっても齢旧るものが成ると徒然草に描かれた猫又は、その後多くの要素を加えられ、化け猫像が形作られていきました。

○　戦国時代―武将と猫

☆秀吉の虎猫

猫様嫌いの織田信長の死後、天下人となった豊臣秀吉。ある時、大阪城で太閤様の愛猫失踪事件が発生します。

「貴殿のところに黒猫が一匹、虎毛の猫が二匹いると承っているが、虎毛のうち美しいほうを拝借願えないだろうか。それでしばらく間に合わせ、その間に力を尽くして猫を探し出し、そちらの猫はお返しする」

捜索を命ぜられたものの猫様を見つけられずに困り果てた浅野長政が、伏見城の普請に携わる野々口五兵衛に送った書状です。

舶来物が好きだった太閤様ゆえ、さぞかし美しい虎毛の唐猫様だったのでしょう。

☆朝鮮出兵と猫

薩摩藩島津家の別邸「仙巌園」に、「猫神神社」があります。

太閤秀吉の命を受け朝鮮出兵した島津義弘公が「文禄・慶長の役」（1592～98年）に7匹の猫様を伴ったことは、其ノ肆でご紹介いたしました。戦地から生還した2匹の霊を祀ったのが「猫神神社」だと伝えられています。

若くして朝鮮で病死した義弘公の次男・久保は、猫様達をたいそう可愛がり、うち1匹にはご自身の名の一字をとって「ヤス」と名付けていました。「瞳孔の形の変化で時を知る」という中国伝来の古戦法に用いるためだけではない、猫様への愛情と深い関係性が伝わってくるお話です。

○　江戸時代―鼠退治と短尾の猫

☆『甲子夜話』

衣類や書物、諸道具に至るまで、瑞穂の国は紙と草木と糊の文化です。特に、養蚕農家にとって鼠の害は死活問題。神仏祈願など様々な対策を講じましたが、猫様を飼うこともその一つでした。

江戸後期の随筆『甲子夜話』には、「此の節、猫至りてはやり、逸物の猫は金七両弐分、常の猫五両、猫の子は二、三両ぐらいの由」とあります。

鼠捕りが得意な猫様ほどお高く、鼠が大量発生すると、市場価格が高騰することもあったとか…。

☆「新田猫絵」

鼠退治のお役目は、生きた猫様ばかりでなく絵姿にも課せられ、「猫絵」が盛んに作られました。

中でも、新田岩松氏のお殿様が江戸後期から明治初期にかけて描いた「新田猫絵」は、鼠除けに特に効果があると信じられ、群馬、埼玉、長野などの養蚕地帯に広まったということです。

「新田猫絵」は、贋作が出回るほどの大人気でした。また、富山の薬売りがもたらす猫絵版画のおまけは、養蚕地域でたいへん喜ばれたようです。

☆「朧月猫の草子」

江戸時代の草双紙・仮名草子・滑稽本などには、猫様のお話も数々あります。

出産、生き別れ、玉の輿、妖怪退治…猫の浮世絵師として著名な歌川国芳の絵による「朧月猫の草紙」は、猫「おこま」の波乱万丈の物語です。

江戸の町では短尾の猫様が流行でした。長い尾は、蛇を連想させることから嫌われ、年を経ると先が裂けて猫又に変じると恐れられたのです。国芳の「猫飼好五十三疋（びょうかいこうごじゅうさんびき）」も、描かれた73匹中の52匹、7割が短尾です。長尾の猫のうちの2匹は、尾が裂けた猫又として描かれています。

○　明治時代―ペストの流行と猫

明治27（1894）年に中国で流行し始めたペストは、瞬く間に香港に達し、船に潜んだ鼠を媒介として港から港へと伝播しました。

中国へ派遣された北里柴三郎は、ペスト菌を発見し、帰国後直ちに検疫、隔離、消毒などを網羅した「伝染病予防法」を成立させました。

明治32年にはペストが神戸に上陸し、横浜、東京にまで拡大します。北里博士は、感染地域で隔離や消毒を指導する一方、7項目の「猫奨励策」を発出して鼠の駆除を徹底的に推進しました。このような対策が功を奏し、日本のペストは4年後には終結。猫様大活躍でございました。

●　楓之典君のつぶやき

―うるわしきもの…猫は、薄き墨色縞にて、腹いと白き　也―